

## 高次脳機能障害者の多職種連携に関する調査研究

研究分担者 西尾香織（帝京平成大学）

### 研究要旨

本研究では、勤労世代の高次脳機能障害者に対する地域連携の実態と連携における課題を明らかにすることを目的として、高次脳機能障害者の就労支援を行っている医療機関に在籍している職員3名にインタビュー調査を実施した。得られた語りからの質的データ分析により、【医療機関と就労支援機関の役割分担の明確化】、【本人の障害認識への支援】、【途切れない支援体制】の3つのコードが抽出された。高次脳機能障害者の地域連携には、急性期医療機関から地域生活や職業生活に向けた途切れのない支援と、高次脳機能障害者特有の障害認識に対する課題への働きかけに焦点を当てた、適時適切な支援体制の確立の必要性が示唆された。

#### A. 研究目的

勤労世代の高次脳機能障害者は約7万人いるとの報告（中島ら，2006）や、高次脳機能障害者の職業復帰へのニーズが高まっており（小泉ら，2017）、医療機関と就労支援機関等他機関との連携がより求められる（池田ら，2017）という指摘がある一方で、国内では専門的な就労支援サービスを利用している高次脳機能障害者が少ないのが現状である（渡邊，2010）。高次脳機能障害者の支援の起点は医療機関であり、医療機関を起点とした地域社会資源との連携に着目することで高次脳機能障害者の就労支援における支援の課題が明らかになると考えるが、国内での医療機関と地域社会資源との連携に着目した先行研究は数少なく、医療機関や就労支援機関で高次脳機能障害者に就労支援を行っている両者の視点から地域連携の実態について明らかにされていない。

そこで本研究では、勤労世代の高次脳機能障害者に対する地域連携の実態と連携における課題を明らかにすることを目的とした。

#### B. 研究方法

##### 1.1 研究対象者

研究対象者の依頼方法は機縁法を用いた。高次脳機能障害者の就労支援を行っている医療機関に在籍している職員に本研究への協力を依頼した。

##### 1.2 データの収集方法

本研究は半構造化面接にて高次脳機能障害者の就労支援における医療機関と就労支援機関との連携の実態や課題に関する個別インタビュー調査を実施した。個別インタビュー調査はインタビューガイド（資料1）に沿って実施した。個別インタビュー

調査は COVID-19 による感染状況に配慮し、オンラインにて実施した。

### 1.3 面接調査項目の内容

研究対象者からは、識別データ（氏名、年齢、性別、所属機関、就労支援の経験年数）を聴取した。

### 1.4 データの分析方法

インタビューによって得られたデータは IC レコーダーによる録音を実施し、録音の内容を逐語録化した。逐語録化したデータは質的データ分析を行った。質的データ分析法は着目したデータから帰納的にコードを作成し、演繹的アプローチの視点を適宜用いながらコード同士の関係やコードとデータの関係の解釈の可能性をデータで検証した。

### 1.5 倫理的配慮

本研究は、帝京平成大学人対象研究倫理委員会の承認(承認番号 R02-049)を得ている。なお本研究は、厚生労働科学研究費補助金による「就労アセスメントの実施促進に向けた多機関連携による就労支援モデル整備のための 調査研究（20GC1001）」による助成を受けている。

## C. 研究結果

本研究に協力が得られた研究協力者は急性期の医療機関で高次脳機能障害者の就労支援を行っている3名(作業療法士2名、社会福祉士1名)であった。

得られたデータより、【医療機関と就労支援機関の役割分担の明確化】、【本人の障害認識への支援】、【途切れない支援体制】

の3つのコードが抽出された。以下に研究協力者の語りより得られた連携における課題に関するコード（“【 】”）とデータの詳細を示す。

コード1：【医療機関と就労支援機関の役割分担の明確化】

- ・近隣の障害者就業・生活支援センターとの連携はうまくいっている。どんな支援者が担当するかもわかっていて役割分担が明確。相談して、いつまでに何をするかなどの道筋の流れが立てやすい。(A氏)
- ・近隣病院間でリハスタッフの勉強会を開催しており、お互いにどのような支援をしているか開示しており、必要に応じてどの病院に繋がるとスムーズかイメージしやすい。(B氏)
- ・就労支援機関の役割分担が明確にあるとよいと思う。就労支援機関の種類が沢山あり分かりにくい面がある。一目で分かる、一覧になっているものがあるとよいと思う。(C氏)

コード2：【本人の障害認識への支援】

- ・高次脳機能障害についての病識の乏しさにより、支援者がドロップアウトしている現状もある。ご本人が必要を感じるまでもっていくことに課題がある。(A氏)

- ・就労支援機関の利用について、本人が必要を感じなければどんなに説得しても（就労支援機関に）繋がらない。(B氏)
- ・「就労支援機関に行くこと」は本人にとってハードルが高い。こちらが就労支援機関を利用するメリットを感じていても本人が問題意識を感じていることがあって利用へと繋がらない。(C氏)

#### コード3：【途切れない支援体制】

- ・急性期病院から自宅退院の場合、外来リハビリに繋ぎ、誰かがサポートできる体制を作っている。(A氏)
- ・地域の取り組みで（受障からの期間の影響で）障害者手帳の取得が出来ない対象者がお試しで就労支援機関を利用できるようになっているので、活用している。(B氏)
- ・「高次脳機能障害者である」とご自身が認めていないケースでは障害者手帳を取得するのは難しい現状がある。(B氏)
- ・医療機関で関われるのは期限があるため、就労支援機関には、急性期などの早期の段階から本人にとって「何かあった時に頼れる先」として欲しい。(C氏)

## D. 考察

以下に研究協力者の語りより得られた、【医療機関と就労支援機関の役割分担の明確化】、【本人の障害認識への支援】、【途切れない支援体制】の3つの課題について考察する。

### 1.1 【医療機関と就労支援機関の役割分担の明確化】

急性期の医療機関に在籍する研究協力者の視点からは、連携がうまくいっている研究協力者と課題を感じている研究協力者とで得られた語りに相違がみられた。

しかし、双方から得られた語りからは「役割分担の明確さ」がキーワードとなっていた。このことから、それぞれの立場から支援する事柄が可視化する働きかけが必要であることが示唆された。

### 1.2 【本人の障害認識への支援】

高次脳機能障害の障害特性のひとつに本人自身の障害認識の困難さが挙げられる。高次脳機能障害者本人の障害認識の難しさについては先行研究でも多くの報告がなされてきた（鎌倉ら，2010；長野，2007；種村，2006）。今回の研究協力者の所属は急性期の医療機関であったことから、受障後短期間のなかで、ご自身の障害を認識し、改善に向けた適切な支援に繋がるには課題が山積していることが示唆された。現時点では、当事者本人が自身の障害を認識したタイミングで、適切な支援を受けることができる環境づくりが課題であることが考えられた。

### 1.3. 【途切れない支援体制】

現行の社会制度のなかでは、精神障害者保健福祉手帳を取得する上で必要な医師か

らの診断書が「初診日から 6 か月以上経過した時点のものであること」が要件のひとつに含まれている。今回のインタビュー調査では地域独自の取り組みにより、障害者手帳を取得する時期に至っていない当事者が就労支援機関を利用しているケースも確認できたが、現時点では全国的な導入には至っていない。現行の社会制度のなかでの適時適切な支援体制の確立の課題が示唆された。

## E. 結論

高次脳機能障害者の地域連携には、急性期医療機関から地域生活や職業生活に向けた途切れのない支援と、高次脳機能障害者特有の障害認識に対する課題への働きかけに焦点を当てた、適時適切な支援体制の確立の必要性が示唆された。

## F. 引用文献

- 池田恵美・八重田淳. (2017). 高次脳機能障害者の医療から就労への移行：量的研究. 職業リハビリテーション, 30(2), 38-46
- 鎌倉矩子・本多留美. (2010). 高次脳機能障害の作業療法. 三輪書店
- 厚生労働省ホームページ：精神障害者保健福祉手帳の診断書の記入に当たって留意すべき事項について  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000>

/000617853.pdf(検索日：2021年3月25日)

小泉香織・八重田淳. (2017). 働く高次脳機能障害の声：質的研究. 職業リハビリテーション, 30(2), 47-56

種村留美. (2006). 高次脳機能障害に介入するとはどういうことか. 鈴木孝治, 早川裕子, 種村留美, 種村純編. 高次脳機能障害マエストロシリーズ4, 医歯薬出版. 2-8

中島八十一・寺島彩. (2006). 高次脳機能障害ハンドブック 診断評価から自立支援まで. 医学書院

長野友里. (2007). 認知リハビリテーション最前線. 神経心理学, 23(2), 97-105

渡邊修. (2010). 東京都の高次脳機能障害者の実態調査からみる就労支援のニーズ. Medical Rehabilitation, 119, 59-64

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

### 2. 学会発表

なし

## H. 知的財産権の出願

なし

### 資料1 インタビューガイド（1時間程度を予定）

高次脳機能障害者の就労支援における医療機関と就労支援機関との連携について

1. 医療機関と就労支援機関の連携の難しさを感じるのはどのような場面ですか？
2. 医療機関と就労支援機関との連携を難しくしている理由はどのようなことだと感じますか？
3. どのようなことがクリアされれば、連携はしやすくなると感じていますか？
4. 医療機関と就労支援機関との連携で「うまくいった」と感じる事例について教えてください。
5. 高次脳機能障害者の就労について、他機関と連携する上で工夫されていることはどのようなことですか？